島根県立看護短期大学紀要
第11巻，119－130，2005

視線行動の表出に関する研究Ⅰ
－視線の「接近-回避モデル」の検討－

飯塚　雄一

概　　要

視線行動と親和，拒否・回避欲求の関係を説明しようとする理論的枠組みの１つに親和葛藤理論がある。この理論によると，対面する二者の一方の直視量を増やす方向の力を接近力と表現し，減らす方向の力を回避力と表現すると，この相対立する力の均衡が一方の最適な直視量及び二者間の最適な相互視量を決定する（視線の「接近－回避モデル」Argyle & Dean)。しかし，このモデルについてのデータには一貫性がない。従来の研究結果を見る限り，モデルが支持されているとは言い難い。そこで，接近力と回避力を規定する先行条件として，欲求に代わり対人感情を導入した修正モデルを提案する。これによって接近－回避のモデルを包括的に表現することができ，明確な予測や説明ができるようになり，利用価値も高まると考えられる。

キーワード：視線行動，直視量，相互視量，接近－回避モデル，対人感情

Ⅰ．は　じ　め　に

非言語的行動における視線行動の研究は1960年代から始まった。これまで，視線行動の客観的測度として，相手に向けた視線の位置（固定点）と向けている時間や頻度（直視量）などが観察，測定されてきた。Nielsen (1962) や Kendon (1967) は，視線の固定点と直視量が発話と関連していることを見出した。このように，自然事態での視線行動の方向や構造の現象記述から研究が始まった。次の段階として，視線行動の原因などを探るため，機能が研究されるようになった。Kendon (1967)は，対人間における視線の機能として次の３つをあげている。即ち，①モニター（情報収集，フィードバック）機能：視線は自分の働きかけに対する相手の行動や表情を読みとり，次の自分の行動を調節するフィードバックの働きをする。②言語的会話を含む相互作用の展開の調整機能：視線の動きは話し手と聞き手の役割を交替する合図となる。③表現機能：相手に対する態度や感情を視線の動きや視線量で伝達する。また，対人関係の記号であるだけに，視線行動は社会規範によりそのあり方が規制されたりすることで，意識的に統制され内面を表す信号としては使用されない場合もあり，社会や文化による違いのあることも指摘されている。中でも，感情や態度と視線行動の関係に最も研究の関心が集中している。その研究課題は，２つに大別される。一つは，視線の送り手の内的状態（感情など）や対人関係を独立変数とし，視線行動を従属変数とする実験的研究（エンコーディングencoding研究）である。もう一つは，視線行動を独立変数とし，内的状態（感情など）や対人関係を従属変数とする実験的研究である。即ち，視線行動が送り手及び受け手の関係に対してどのような影響を与えるかについての研究（ディコーディングdecoding研究）である。対面して会話している二者間における対人感情と視線行動との関係について，実験室場面で多く検討されてきた。そして，好意，非好意感情と視線行動とが密接に関連していることが示唆されている。しかし，探索的研究が多く理論的な意味づけや解釈があ

まりなされていない。また従来の視線行動の研究では，研究者が自分の研究を追試しても結果が異なるという再現性の低さも指摘されている。そして“ゴミ箱的経験主義dustbowl empiricism”といわれるくらい十分な理論的枠組みを持たずに展開される傾向があった(McGuire, 1985）ので，今後，統一的，体系的な整理をすることには意義がある。日常の人間関係でも重要な意味を持つ視線行動を心理学的に検討することで，対人的相互作用のメカニズムをより深く理解することができる。

Ⅱ．視線行動と対人感情の関連に関する研究の展望

1．視線の「接近—回避モデル」とその検証

(1)視線の「接近—回避モデル」

視線行動と親和，拒否・回避欲求の関係を説明しようとする理論的枠組みの１つに親和葛藤理論（affiliative conflict theory: 以下ＡＣ理論と略記）がある(Argyle,1994 ; Argyle & Cook, 1976; Argyle & Dean, 1965)。これは，もともとMiller(1944)によるラットの学習実験で，目標へ接近する傾向と回避する傾向が同時に生起し，それが相拮抗するという葛藤理論に示唆を得て提唱されたものである。つまり，対人相互作用にも相対立する欲求（あるいは動機）の葛藤が想定されるとしている。ＡＣ理論によると，対面する二者（AとB）の一方（A又はB）の直視量を増やす方向の力を接近力と表現し，減らす方向の力を回避力と表現すると，この相対立する力の均衡が一方の最適な直視量及び二者間の最適な相互視量を決定する。直視量や相互視量が均衡した量を超えると人は不安・気恥しさを感じ，下回ると物足りなさや不満を感じ，いずれの場合も直視量や相互視量を元のレベルへ戻そうとするとされている。ここで接近力とは，親和欲求とフィードバック欲求に基づくものである。回避力とは，見られること，内的感情を相手に知られること，などに対する恐れによる拒否・回避欲求に基づくものであるとされている。ＡＣ理論中のこの部分は視線の「接近ー回避モデル」と呼ばれている（Argyle & Graham, 1977)。視線量の増減のメカニズムを説明するために，このモデルで重要な点は，視線行動を生起させたり抑制している直接の心理的状態は欲求（接近力，回避力）であると考える必要がある（Argyle, 1983)。ある人がある行動をとろうとするのは，そのような欲求がその人の内に生じるからである。相手に接近したいと思い，視線を多く向ける行動がとられ，相手を避けたいと思い，視線を外すという行動がとられる。つまり，欲求（接近力，回避力）が生じ，視線行動が生起するという関係式で欲求と視線行動の関係をとらえることができる。Argyle & Dean(1965), Argyle & Graham(1977）の視線の「接近—回避モデル」を図示したのが図１である。

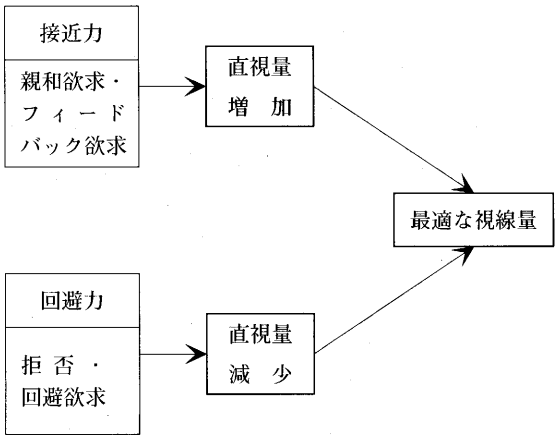

図１　視線の「接近—回避モデル」

このような考え方は，親和欲求と関連する相互視以外の他の行動にも適用できる。即ち，対人距離，話題の親密さ，微笑，などについても均衡点がある。さらに，ある人間関係には，その関係に応じて親密性レベル（二者間の親密さの程度）が存在する。　この親密性は，身体的接近，話題の親密さ，微笑，などが組合わさったものである。そして，もしこれらの構成因の１つが変化すると，他の要因間で親密性レベルを元に戻そうとする補償的な変化が起るとするのである。多くの研究者が，このＡＣ理論の親密性レベル維持の部分に注目し，対人距離が遠くなれば，相互視量が増加し，近くなれば減少するという補完関係を見出している(Coutts & Schneider, 1975; Patterson, 1977; Bailenson, et al., 2001, 2003)。

(2) 視線の「接近ー回避モデル」に関する先行研究

視線の接近－回避モデルでは，親密な関係を求める欲求（親和欲求）と視線量に相関がみられるとされている。Exline（1963）は，親和欲求の高い女性は低い者より多く視線を向け合うことを見出している。Exline, Gray, & Schuette (1965)は，男女各40名の学生にSchutzの対人関係尺度（FIRO-B）を実施し，面接中の視線行動との関係をみた。その結果，愛情を求める得点の高い者ほど，直視量（回数）が多くなり，モデルが支持されていた。Exline & Messick (1967)は，34名の男子学生をFIRO-Bにより分類し，依存欲求が高い者が，面接者に対する直視量が多いことを示している。

次に，親和欲求を直接操作（利用）して視線行動に及ぼす影響をみた研究もいくつかある。Pellegrini, Hicks, & Gordon (1970)は，対人距離を一定にして，承認を求める欲求（親和欲求）は視線量を増加させ，承認を回避する欲求（回避欲求）は視線量を減少させるというモデルの予測する仮説を検討した。その結果，親和欲求群（総量：67.46, 回数：27.88），統制群（総量：50.42, 回数：21.54），回避欲求群（総量：44.58, 回数：20.75）と，条件差は有意となり，モデルの予測通りとなっていた。また相手からの承認を期待する（承認欲求がある）時に，視線量が増加するという結果を示した研究もある（Efran, 1968; Efran & Broughton, 1966; Fugita, 1974）。Nevill(1974)は，困難な課題について援助を止めたり，援助することで依存欲求を実験的に操作した。課題後の面接場面で，依存欲求の高い者が面接者への直視量が多くなったことを示した。Lefebvre(1975)も，男性被験者が女性実験協力者に取り入る（親和欲求を増す）よう教示する群と統制群の直視量を比較した。その結果，親和欲求を増すよう教示した群（総量：75.34%, 平均時間：4.64秒）の方が統制群（総量：57.16%, 平均時間：2.61秒）より直視量が多くなり，モデルが支持されていた。

他方，福原（1977）は，日本版FIRO-Bによって高親和群と低親和群に被験者を分け，面接者との距離別に相互視量に差があるかを検討したが，いずれも有意差を見いだしていない。つまり，モデルの予測を支持する，親和欲求が高い者が低い者より視線量が多いという結果を得ていない。彼は被験者をFIRO-B尺度の得点分布で高親和群と低親和群に分けているが，両群の平均値に大きな差はなく，低親和群といえ，親和欲求は低くなかった。視線量に差がみられなかったのは，被験者の親和欲求の高低を十分区別できなかったためと考察している。

また，Kendon & Cook(1969)は，11名の被験者が4名の他の被験者とそれぞれ30分間会話する間の視線量を測定した。44回の会話に基づく視線量の諸測度とFIRO-Bで測定された欲求との相関をみている。それによると親和欲求の高い者と聴取中の直視回数に負の相関（-.48, $p < .05$）があった。また，他者と共に居ようとする欲求の高い者と相互視平均時間に正の相関（.51, $p < .05$）がみられている。またGray(1971)の研究でも，愛情を求める者が必ずしも相手に視線を多く向けてはいない，という結果もある。

次にHobson, Strongman, Bull, & Craig(1973)は，視線の「接近－回避モデル」において回避欲求が視線量を減少させるという仮説を検討している。これは，被験者と実験協力者の会話の途中（2分後）で，実験者が被験者に次のような教示をして不安を操作する。ここで彼らは，不安を回避欲求とみなしている。「あなたは話が下手で，退屈である。もっと面白くしてもらわないと結果が駄目になるので，もう一度話してもらいます。」（不安群），「あなたは大変上手に話している。もう一度同じようにやって下さい。」（肯定群），「今休憩中です。もう一度続けてください。」（統制群）。実験後質問紙（不安評定）とスピーチ混乱率により操作の有効性は確認された。結果は，不安操作後の2分間の会話中の各群の被験者の相手に対する視線量に差はみられず，モデルは支持されなかった。

(3) 視線の「接近－回避モデル」の妥当性

以上のように，モデルを支持する結果と不支持の結果が混在している。つまり，親和欲求（接近力），拒否・回避欲求（回避力）と視線量の増減との関係に一貫性がみられていない。Rutter(1984)も，このモデルについてのデータには一貫性がなく，理論的にもあまり明確ではないと述べている。したがって，従来の研究結果を見る限り，モデルが支持されているとは言い難い。

2．視線の対人感情包括的「接近—回避モデル」の構築と提案

(1) 視線の「接近—回避モデル」の問題点とモデルの改良の方向性

Argyle & Dean(1965)は，あらゆる対人相互作用にはある程度の親密感情（intimacy）の表出がみられるとしている。つまり，対人感情の表出は対人相互作用に不可欠の本来的に備わった特質であることを示唆している。そして更に，Argyle & Cook(1976)は，視線の「接近—回避モデル」は対人感情と視線行動の関連性をも説明するモデルであると述べている。

ところで，一時的な心理過程である欲求に対して，対人感情は，特定の他者について個人が持っている比較的持続的で安定した感情傾向である（深田，1987）。またHeider(1954)は，「人々の間で起こる行為の多くは，それらを動かす感情を識別して初めて理解できる」（p.174）として，対人関係の研究において，対人感情の理解が重要であることを指摘した。従って，接近力と回避力を規定する先行条件として，欲求に代わり対人感情を導入すると，Argyleのモデルを包括的に表現することができ，明確な予測や説明ができるようになり，利用価値も高まると考えられる。

さて，この対人感情と欲求との関係は，接近したいとかしたくないという対人的欲求を決定する基盤が対人感情であるという関係になる。ある対人感情をもつ時には，それに随伴する欲求が生じると考えられる。事実，好意感情に親和欲求が随伴し，非好意感情に拒否・回避欲求が随伴することが報告されている（齋藤，1990）。このように，欲求の生起には，相手に対する対人感情が大きな影響を及ぼす。ある一定の感情傾向には，それに随伴する欲求があり，その感情傾向をもった時は，それに随伴する欲求が生じる。この欲求は，接近力，回避力を内包している。そして，この２つの力に応じた視線行動がとられると考えられる。例えば，好意的感情を抱く相手を目の前にしたときは，好きという感情と同時に，好意感情に随伴している親和欲求（接近力）などが生じる。そして，この接近力に基づいた行動が生起する。つまり，相手に視線を多く向けるとか，相手に接近していくという親和的行動が行われる。一方，嫌悪を抱いている相手には，嫌いという感情と同時に，嫌悪感情に随伴している拒否的欲求（回避力）などが生じる。そして，この回避力に基づいた行動が生起する。つまり，相手から視線を外すとか，相手から離れるという回避的行動が行われるのである。

次に，Argyleらのもともとの視線の「接近－回避モデル」（Argyle & Dean, 1965）は，主に相互視について言及し，直視にはふれていないので，個人よりペアが分析の単位であろうと考えられる。従って，初期の研究の多くが相互視を重視し検討していた。しかし後に，Argyle（1983, 1994）は，直視量についても最適レベル（均衡レベル）があるとしている。またRutter（1984）の指摘のように，相互視は２人の単なる直視の重なりであり，直視こそが基本的に重要であり，また直視によって対人感情が表出される。そこで，２者（A, B）のうちの一方（ＡまたはＢ）の側の行動に限定したモデルを考慮する必要がある。

(2) 視線の対人感情包括的「接近—回避モデル」の提案

以上のような過程を，筆者は図２のように一括した形で表現し，視線の対人感情包括的「接近—回避モデル」と呼ぶことにする。図２は，対面する一方の側の直視量に関するモデルである。これによって，二者の一方の側の対人感情と視線行動に関する予測が明確にできると考えられる。なお，「接近－回避モデル」では接近力と回避力は構成概念であり，直接測定されていない。

対人感情包括的「接近-回避モデル」によると，対人距離などの非言語的行動が一定ならば二者関係で好意感情を抱いている他者に対しては親和欲求が生じ，接近力が相対的に強くなるとともに，回避力が弱くなるので視線量が多くなると考えられる。これに反し，非好意感情を抱いている他者に対しては拒否・回避欲求が生じ，回避力が相対的に強くなる反面，接近力は弱くなるので視線量が少なくなると予想される。このように，このモデルから肯定的，否定的な対人感情と視線行動の間の規則的関連性が示唆される。

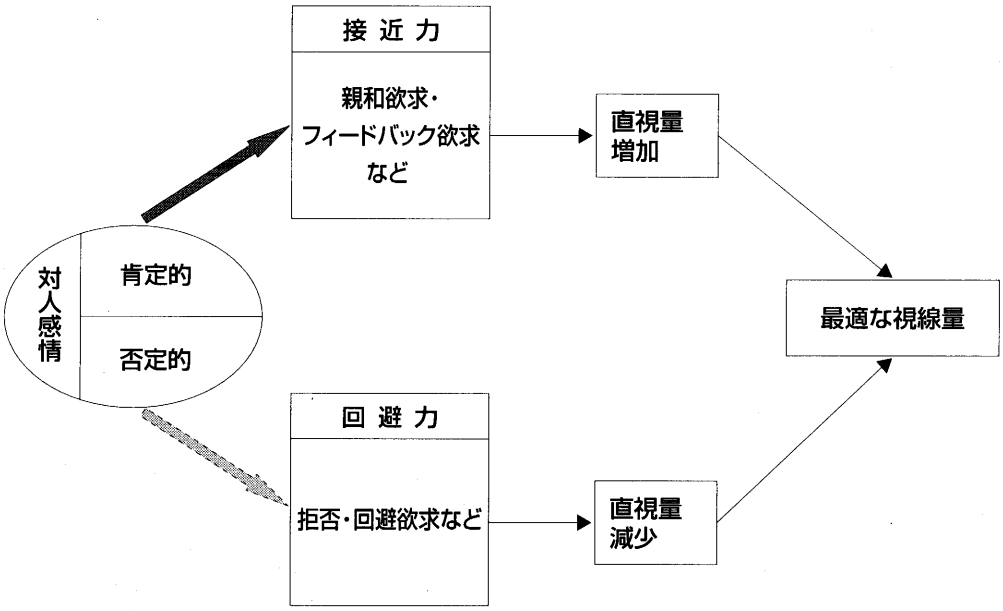

図２　視線の対人感情包括的「接近―回避モデル」

(3) 視線の対人感情包括的「接近―回避モデル」に関係する先行研究

視線の対人感情包括的「接近―回避モデル」に関係する研究（エンコーディング研究）例を表１に挙げた。

表１に示すように，先行研究の多くは，２水準以上の肯定的感情要因(１水準は中立的感情を含む)を用いた研究であった。つまり，対人感情包括的「接近―回避モデル」（図２）の上半分（接近力）の直接的検証に役立つものが多い。これらのほとんどの研究で，弱い肯定的感情より強い肯定的感情の場合に視線量が多くなっている。９研究がモデルを支持していた。しかし，５研究はモデルを支持していない。すなわち，和田（1986）はByrne(1969)の好意度操作法により好意感情の高低を操作して有効性を確認しているが，強い肯定的感情（高好意）でも平均値が４.５(７段階評定)で中点に近い。つまり，視線量に反映するほどに強い肯定的感情が喚起されなかったものと考えられる。次に，友人同士と未知同士を被験者としながらモデルを支持していない研究(和田, 1989；Pennington & Rutter, 1981）もある。これは，友人同士では未知同士より接近力が強いので視線量が多くなるという仮定によってのみ二者間の視線量を測定し比較している。しかしながら，両研究ともに友人同士が未知同士より好意感情が強いという確認はなされていない。Rutter & Stephenson (1979)は，同性の未知同士と友人同士の視線行動を比較している。その結果，未知同士が同性の友人同士より相互視量，直視総量（%），直視平均時間が多くなった。この実験では，被験者の半数の組に政治社会的話題について“お互いに相手を自分の意見に従わせるように説得する”，別の半数の組には，“相手と同じ意見になるよう協力的討論をする”，という教示（会話の意図）がなされていた。つまり，強力な意図要因（支配欲求）が介在したために，直視量が増加したと考えられる。

そして，対人感情包括的「接近―回避モデル」(図２)の下半分（回避力）を直接的に検証している先行研究はわずか２研究しか存在しないが，１研究がモデルを支持し(Efran & Cheyne, 1974)，１研究がモデルを支持しなかった(Vrugt, 1990)。すなわち，Efran & Cheyne (1974)は，被験者に二者会話中の実験協力者の共有空間侵入させる時の視線行動を観察した。その結果，二者の間を歩く侵入強群（強い否定的感情），二者の側を歩く侵入弱群（弱い否定的感情），実験協力者とカメラの間を歩く統制群（中立的感情）の順に視線行動が多くなりモデルを支持していた。しかし，Vrugt(1990)は，

表１　視線の対人感情包括的「接近―回避モデル」に関係した先行研究

１．視線の対人感情包括的「接近―回避モデル」に沿った先行研究（接近的肯定感情と回避的否定的感情を扱った研究）

１）視線の対人感情包括的「接近―回避モデル」の直接的検証には役立たない研究（間接的証拠を提供する研究）
肯定的感情と否定的感情を対比的に２水準１要因として用いた研究
視線量…肯定的感情＞否定的感情（モデルを間接的に支持）
Palmer & Simmons (1995)
２）視線の対人感情包括的「接近-回避モデル」の上半分（接近力）の直接的検証に役立つ研究
２水準以上の肯定的感情要因を用いた研究（１水準は中立的感情を含む）
視線量…強い肯定的感情＞弱い肯定的感情（モデルを支持）
Coutts & Schneider (1976), Foot, Chapman, & Smith (1977), Goldstein, Kilroy, & Van de Voort (1976), Guerrero (1997), Maxwell, Cook, & Burr (1985), McAdams, Jackson, & Kirshnit (1984), Murray & McGinley (1972), Rubin (1970), Russo (1975)
視線量…強い肯定的感情≦弱い肯定的感情(モデルを不支持)
Glasgow & Arkowitz (1975), 和田(1986)
視線量…肯定的感情≦中立的感情(モデルを不支持)
Pennington & Rutter (1981), Rutter & Stephenson (1979), 和田 (1989)
３）視線の対人感情包括的「接近―回避モデル」の下半分（回避力）の直接的検証に役立つ研究
２水準以上の否定的感情要因を用いた研究（１水準は中立的感情を含む）
視線量…強い否定的感情＜弱い否定的感情＜中立的感情（モデルを支持）
Efran & Cheyne(1974)
視線量…否定的感情≧中立的感情（モデルを不支持）
Vrugt (1990)
4) 視線の対人感情包括的「接近―回避モデル」の組織的体系的な直接的検証に役立つ研究
肯定的感情、中立的感情、否定的感情を３水準１要因として用いた研究
視線量…肯定的感情＞中立的感情＞否定的感情(モデルを支持)
Exline & Winters (1965)
視線量…肯定的感情＝中立的感情＞否定的感情(モデルを部分的に支持) Breed (1972)
視線量…肯定的感情＜中立的感情＞否定的感情(モデルを不支持) Mehrabian (1968)

２．対人感情包括的接近―回避モデルの枠を越えた先行研究（接近的否定的感情と回避的肯定的感情を扱った研究）

１）２水準以上の接近的否定的感情要因を用いた研究（１水準は中立的感情を含む）
視線量…強い否定的感情＞弱い否定的感情
Kimble, Forte, & Yoshikawa (1981), Kimble & Olszewski (1980), Lochman & Allen (1981), Patterson, Mullens, & Romano (1971)
２）２水準以上の肯定的感情要因を用いた研究（１水準は中立的感情を含む）
視線量…強い肯定的感情＜弱い肯定的感情
Thornquist, Zuckerman, & Exline (1991)

面接技能の評価の研究という名目で，男性セラピスト（面接者）がクライアント群と非クライアント群に，心理学授業の満足度についての面接をさせた。セラピストにクライアントと非クライアントの自己記述文を読ませることで，対人感情操作を行った。クライアント群は，自信がなく，他人との関係がうまくいかない，などの自己記述であり，非クライアント群は，自信があり，他人との関係もうまくいっている，などの自己記述であった。その結果，セラピストはクライアント群(M = 4.24)より非クライアント群(M = 2.68)に否定的感情をもった。しかしセラピストの相手に対する直視量には差がみられず，モデルは支持されていない。

更に，より組織的体系的なモデルの直接的検証に役立つ研究が3研究存在する。Exline & Winters(1965)の研究では，面接者から否定的評価，中立的評価，肯定的評価を受けた被験者の視線量の変化量は，それぞれ，3.3 %の増加，変化なし，8.8 %の減少となりモデルを支持していた。またBreed (1972)も，被験者の肯定的態度，中立的態度，否定的態度に対して，被験者の相互視量は，肯定的態度＝中立的態度＞否定的態度となりモデルを部分的に支持していた。しかし，Meharabian(1968)の研究は，肯定的感情と否定的感情の両方が中立的感情よりも視線量を減少させることを報告し，モデルが支持されなかった。

(4) 対人感情包括的「接近—回避モデル」の妥当性

以上のように，モデルを支持する結果と不支持の結果が混在している。つまり，接近的肯定感情と回避的否定的感情と視線量の増減との関係も一貫していない。従って，従来の研究結果を見る限り，モデルが支持されているとは言い難いので再検討の必要がある。

3．対人感情包括的「接近—回避モデル」の問題点と限界

(1) 対人感情包括的「接近—回避モデル」で説明しきれない研究結果

Fromme & Schmidt(1972)は，男子学生に，恐怖，怒り，悲しみ及び中立的な感情を対面相手に表出させたところ，非好意的な怒り感情でも相互視量が多くなることを見出した。また，男女被験者が図書館で机に座っているところへ，実験協力者（侵入者）が視線を向けて（30%）近くへ座る。このような侵入に対して，被験者は姿勢の動きや，侵入者に対する直視量を増加させた(Patterson, Mullens, & Romano, 1977)。これは，侵入者に対するする非好意感情が示された状況であり，視線量の増加は嫌悪を意味していると考えられる。Lochman & Allen(1981)は，恋愛関係にあるカップルに葛藤場面を役割演技させて，言語，非言語的な同意，非難を観察測定した。非言語的な非難行動カテゴリーの中の相互視回数について，男女ともに不平，苦情と相互視回数に相関を見いだしている。つまり，弱い非難（弱い否定的感情）を表出する時には直視量が少ないが，強い非難（強い否定的感情）を表出する時には直視量が増加していることが見いだされた。以上の諸研究は，視線量の増加をもたらす特殊な否定的感情の存在を示唆するものである。

これらの矛盾する事実を統合してモデルを修正する必要性は，既にFromme & Beam (1974)によって示唆されているものの，未だ検討はなされていない。

(2) 否定的な接近力に関する検討課題

先行研究でみたように，好意・非好意感情と視線行動の関係がモデルの予測とは逆であることを示す研究がある。つまり，好意感情がある（接近力が強い）場合にも非好意感情がある（回避力が強い）場合にも視線量が増えることがある。これが，視線の対人感情包括的「接近—回避モデル」に対する問題点となっている。

次に，視線の対人感情包括的「接近－回避モデル」の限界は，肯定的な感情が接近力，否定的な感情が回避力と関連すると限定しているところにある。しかし，例えば，怒り感情は，否定的で不快な感情であると同時に攻撃性・支配性をも含んでいる（Fromme & Beam, 1974; Osgood, 1966）。一般に動物は，怒り，攻撃性，支配性を示すのに相手に視線を多く向けて睨むという事実がよく知られている（Darwin, 1872; Eibl-Eibesfeldt, 1973）。更に，視線量の増加が支配欲求(Strongman & Champness, 1968)や敵対的，攻撃的欲求（Ellsworth, Carlsmith, & Henson, 1972）の表れであるとする研究もある。

したがって，Fromme & Schmidt (1972)の怒り感情表出における視線量増加は，攻撃性・支配性が顕著に表出された結果の反映とみられる。このように，彼らの結果をも包括的に説明するためには，新たに“攻撃・支配欲求”を接近力の中に含める必要があると考えられる。なおこの場合の接近力は，好意感情のもつ肯定的な接近力とは異なる，否定的な接近力であると考えられる。しかし，こうした視点の存在は，視線の「接近－回避モデル」では考慮されていない。

また，接近力，回避力は内的なものであり，測定ができないという限界もある(Aiello, 1987)。このように，このモデルには様々な問題点があるが，ＡＣ理論は発見的な価値を持っており，今後も対人関係の理論化にとって重要な役割をするであろう（Harper, Wiens, & Mattarazzo, 1978)。

本研究における発展的課題として，否定的な接近力の問題を検討することがあげられる。すなわち，怒りのような否定的感情が視線行動を増加させるかどうかを検討することにより，否定的接近力の存在を証明することが，本研究の第２の課題である。

４．日本における視線の対人感情包括的「接近－回避モデル」検討の意義

先に述べたように，視線行動は文化規定的である。例えば，日本人は欧米人に比べて，他者に向ける視線量を抑制することが指摘されている(Argyle & Cook, 1976)。また，欧米の「視線を合わす文化」に対し，我が国が「視線を避ける文化」と呼ばれている（井上，1982)。このように，欧米人の視線行動と日本人のそれは意味が異なる（Argyle & Cook, 1976）という指摘にもかかわらず，これまで我が国では欧米の諸研究の追試さえもあまり試みられず，研究数が多いとはいえない。例えば，視線の「接近－回避モデル」及び視線の対人感情包括的「接近－回避モデル」に直接関連する我が国の先行研究は，筆者の研究を除くと，わずか２例（和田，1986, 1989）が報告されているに過ぎない。視線は，文化差の大きいチャンネルでもあるので，欧米の結果がそのまま日本人に妥当しない場合もありうる。従って，日本における視線行動を組織的に研究する意義は大きい。そこで，欧米とは文化の異なる我が国においても，視線の対人感情包括的「接近－回避モデル」が適用されるかどうか検討することには付加的な意義がある。そして，本研究の知見は，現実の日本人の対人関係で生起している諸問題の解決に役立てることができるかもしれない。事実，欧米では社会的スキルトレーニング（social skill training）で視線量のコントロールの問題が取り上げられている。

今後の課題としては，日本において，肯定的あるいは否定的な対人感情が視線行動に及ぼす影響を視線の対人感情包括的「接近－回避モデル」（図２）の立場から体系的に検討することである。

Ⅲ．おわりに

これまでみてきたように，視線の「接近－回避モデル」についてのデータには一貫性がなかった。従来の研究結果をみる限り，モデルが支持されているとは言い難い。そこで，本論考では，接近力と回避力を規定する先行条件として，欲求に代わり対人感情を導入した修正モデルを提案した。これによって接近－回避のモデルを包括的に表現することができ，明確な予測や説明ができるようになり，利用価値も高まると考えられる。

文　　献

Aiello, J. A. (1987): Human spatial behavior. In D. Stokols & Altman (Eds.),*Handbook of environmental psychology* (Vol.1) New York: John Wiley & Sons. Pp. 389-504.

Argyle, M. (1983): *The psychology of interpersonal behaviour* (4th Ed.). London: Penguin Books Ltd

Argyle, M. (1994): *The psychology of interpersonal behaviour* (5th Ed.). London: Penguin Books Ltd.

Argyle, M., & Cook, M. (1976): *Gaze and mutual gaze.* Cambridge, UK: Cambridge University Press.

Argyle, M., & Graham, J. A. (1977): The

Central Europe experiment-looking at persons and looking at objects. *Environmental Psychology and Nonverbal Behavior,* 1, 6-16.

Argyle, M., & Dean, J. (1965): Eye contact, distance and affiliation. *Sociometry,* 28, 289-304.

Bailensen, J. N., Blascovich,J., Beall, A. C., & Loomis, J. M. (2001): Equilibrium theory revisited: Mutual gaze and personal space in virtual environments. *Presence,* 10, 583-598.

Bailensen, J. N., Blascovich, J., Beall, A. C., & Loomis, J. M. (2003): Interpersonal distance in immersive virtual environments. *Personality and Social Psychology Bulletin,* 29, 819-833.

Breed, G. (1972): The effect of intimacy: Reciprocity or retreat? *British Journal of Social and Clinical Psychology,* 11, 135-142.

Byrne, D. (1961): Interpersonal attraction and attitude similarity. *Journal of Abnormal and Social Psychology,* 62, 713-715.

Coutts, L, M., & Schneider, F. W. (1976): Affiliative conflict theory: An investigation of the intimacy equilibrium and compensation hypothesis. *Journal of Personality and Social Psychology,* 34, 1135-1142.

Darwin, C. (1872): *The expression of emotion in men and animals.* London: Murray. / 濱中濱太郎(1931):人間と動物の感情について，岩波書店

Efran, J. S.(1968): Looking for approval: Effects on visual behavior of approbation for persons differing in importance. *Journal of Personality and Social Psychology,* 10, 21-25.

Efran, M. G., & Cheyne, J. A.(1974): Affective concomitants of the shared space: behavioral, psychological, and verbal indications. *Journal of Personality and Social Psychology,* 29, 219-226.

Efran, J. S., & Broughton, A. (1966): Effects of expectancies for social approval on visual behaviors. *Journal of Personality and Social Psychology,* 4, 103-107.

Eibl-Eibesfeldt, I. (1970): *Liebe und hass - Zur naturgeschichte elementarer Verhaltensweisen.* Munchen: P.Piper & Co. Verlag./日高敏隆・久保和彦（1974）：愛と憎しみ－人間の基本的行動様式とその自然誌１，２ みすず書房

Ellsworth, P. C., Carlsmith, J. M., & Henson, A. (1972): A stare as a stimulus to flight in human subjects : A series of field experiments. *Journal of Personality and Social Psychology,* 21, 302-311.

Exline, R. V. (1963): Explorations in the process of person perception: Visual interaction in relation to cooperation, sex and need for affiliation. *Journal of Personality,* 31, 1-20.

Exline, R. V., Gray, D., & Schuette, D. (1965): Visual interaction in a dyad as affected by interview content and sex of respondent. *Journal of Personality and Social Psychology,* 1, 201-209.

Exline, R. V., & Winters, L. C. (1965): Affective relations and mutual glances in dyads. In S. S. Tomkins & C. E. Izard (Eds.), *Affect, cognition, and personality.* New York: Springer.

Foot, H. C., Chapman. A. J., & Smith, J. R. (1977): Friendship and social responsiveness in boys and girls. *Journal of Personality and Social Psychology,* 35, 401-411.

Fromme, D. K., & Beam, D. C. (1974): Dominance and sex differences in nonverbal responses to differential eye contact. *Journal of Research in Personality,* 8, 76-87.

Fromme, D. K., & Schmidt, C. K. (1972): Affective role enactment and expressive behavior. *Journal of Personality and Social Psychology,* 24, 413-419.

Fugita, S. S. (1974): Effects of anxiety and approval on visual interaction. *Journal of Personality and Social psychology,* 29, 586-592.

深田博己　(1998): インターパーソナル・コミュニケーション　北大路書房

福原省三　(1977): 社会的相互作用過程における視線行動の実験的研究　実験社会心理学研究, 17, 30-38.

Glasgow, R. E., & Arkowitz, H. (1975): The behavioral assessment of male and female social competence in dyadic heterosexual interactions. *Behavior Therapy,* 6, 488-498.

Goldstein, M. A., Kilroy, M. C., & Van de Voort, D. (1976): Gaze as a function of conversation and degree of love. *Journal of Psychology,* 92, 227-237.

Gray, S. L. (1971): Eye contact as a function of sex, race, and interpersonal needs. Doctoral dissertation, Case Western Reserve University. [*Dissertation Abstract,* 32, (1971), 1842B. University Microfilms No.71-22,805]

Guerrero, L. K. (1997): Nonverbal involvement across interactions with same-sex friends, opposite-sex friends and romantic partners: consisitency or change? *Journal of Social and Personal Relationships,* 14, 31-58.

Harper, R. G., Wiens, A. N., & Mattarazzo, J. D. (1978): *Nonverbal communication: The state of the art.* New York: John Weily & Sons.

Heider, F. (1954): *The psychology of interpersonal relations.* New York: John Weily & Sons.

Hobson, G. N., Strongman, K. T., Bull, D., & Craig, G. (1973): Anxiety and gaze aversion in dyadic encounters. *British Journal of Social and Clinical Psychology,* 12, 122-129.

井上忠司　(1982): まなざしの人間関係　講談社

Kendon, A. (1967): Some functions of gaze direction in social encounters. *Acta Psychologica,* 26,1-47.

Kendon, A., & Cook, M. (1969): The Consistency of gaze patterns in social interaction. *British Journal of Psychology,* 69, 481-494.

Kimble, C. E., & Olszewki, D. A. (1980): Gaze and emotional expression: The effects of essage positivity-negativity and emotional intensity. *Journal of Research in Personality,* 14, 60-69.

Kimble, C. E., & Forte, R. A., & Yoshikawa, J. C. (1981): Nonverbal concomitants of enacted emotional intensity and positivity: Visual and vocal behavior. *Journal of Personality,* 49, 271-283.

Lefebrve, L. M. (1975): Encoding and decoding of ingratiation in modes of smiling and gaze. *British Journal of Social and Clinical Psychology,* 14, 33-42.

Lochman, J. E., & Allen, G. (1981): Nonverbal communication in conflict. *Journal of Research in Personality,* 15, 253-269.

Maxwell, G. M., Cook, M. W., & Burr, R. (1985): The encoding and decoding of liking from behavioral cues in both auditory and visual channels. *Journal of Nonverbal Behavior,* 9, 239-263.

McAdams, D. P., Jackson, R. J., & Kirshnit, C. (1984): Looking, laughing, and smiling in dyads as a function of intimacy motivation and reciprocity. *Journal of Personality* 52, 261-273.

McClintock, C. C., & Hunt, R. G. (1975): Nonverbal indicators of effect and deception in an interview setting. *Journal of Applied Social Psychology,* 5, 54-67.

McGuire, W. J. (1985): Attitudes and attitude change. In G. Lindzey & E.Aronson (Eds.), *Handbook of social psychology.* 3rd ed. Vol. 2. New York: Random House. Pp. 233-346.

Mehrabian, A. (1968): Relationship of attitude to seated posture, orientation and distance. *Journal of Personality and Social Psychology,* 10, 26-30.

Murray, R. P., & McGinley, H. (1972): Looking as a measure of attraction. *Journal of Applied Social Psychology,* 2, 267-274.

Nevill, D. (1974): Experimental manipulation of dependency motivation and its effects on

eye contact and measures of field dependency. *Journal of Personality and Social Psychology,* **29**, 72-804.

Nielsen, G. (1962): *Studies in self confrontation.* Copenhagen: Monksgaard.

Osgood, C. E. (1966): Dimensionality of the semantic space for communication via facial expression. *Scandinavian Journal of Psychology,* **7**, 1-30.

Palmer, M.T., & Simmons, K.B. (1995): Communicating of intentions through nonverbal behavior. *Human Communication Research,* **22**, 128-160.

Patterson, M. L. (1977): Interpersonal distance, affect, and equilibrium theory. *Journal of Social Psychology,* **101**, 205-214.

Patterson, M. L., Mullens, S., & Romano, J. (1971): Compensatory reactions to spatial intrusion. *Sociometry,* **34**, 114-121.

Pellegrini, R. J., Hicks, R. A., & Gordon, L. (1970): The effect of an approval seeking conduct on eye contact in dyads. British *Journal of Social and Clinical Psychology,* **9**, 373-374.

Pennington, D. C., & Rutter, D. R. (1981): Information or affiliation? Effects of intimacy on visual interaction. *Semiotica,* **35**, 29-39.

Rubin, Z. (1970): Measurement of romantic love. *Journal of Personality and Social Psychology,* **16**, 265-273.

Russo, N. F. (1975): Eye contact, interpersonal distance, and the equilibrium theory. *Journal of Personality and Social Psychology,* **31**, 497-502.

Rutter, D. R. (1984): *Looking and seeing.* New York：John Wiley & Sons.

Rutter, D. R., & Stephenson, G. M. (1979): The functions of looking: Effects of friendship on gaze. *British Journal of Social and Clinical Psychology,* **18**, 203-205.

齊藤　勇　(1990): 対人感情の心理学　誠信書房

Strongman, K. T., & Champness, B. G. (1968): Dominance hierarchies and conflict in eye contact. *Acta Psychologica,* **28**, 376-386.

Thornquist, M. H., Zukerman, M. & Exline,R. V. (1991): Loving, liking, looking and sensation seeking in unmarried college couples. *Personality Individual Difference,* **2**, 1283-1992.

Vrugt, A. (1990): Negative attitudes, nonverbal behavior and self-fulfilling prophesy in simulated therapy interviews, *Journal of Nonverbal Behavior,* **14**, 77-86.

和田実　(1986): 好意、対人感情および話題が非言語的行動と自己開示に及ぼす影響　実験社会心理学研究, **26**, 1-12.

和田実　(1989): 二者関係、対人距離および話題が非言語的行動に及ぼす影響－現実の二者関係にもとづいて－　心理学研究, **60**, 31-37.

飯塚　雄一

A study on the expression of visual behavior: A test of the approach - avoidance model of gaze

Yuichi IIZUKA

Abstract

We extensively reviewed literature concerning Argyle & Dean's model of gaze. This model states that there are both approach and avoidance forces behind gaze. If it is true that both these opposite forces exist, then there can also be a state of conflict. It follows that there is an equilibrium level of gaze for each person and of mutual gaze for any two people. The original model supposes that gaze is under the influence of motivational forces (affiliative needs). Many experimental data, including four of our earlier studies, supported this model. However, some studies have failed to confirm the model. We replaced affiliative needs with interpersonal affect. That is, we expanded this model and proposed an extended approach - avoidance model of gaze. We suggest testing the extended approach to the avoidance model of gaze.

Key Words and Phrases: visual behavior, gaze, mutual gaze, approach-avoidance model, interpersonal affect